先輩から

私の「The Long And Winding Road」

湯浅　麻里子（2022 修 外国語教育学研究科）

「大学で正規職員として働きたいなら、もう一度、大学院へ行くしかないんじゃない？」。「じゃあ、行く！」。夫の挑発に、私は飛びつきました。当時の私は46歳、大学非常勤講師。大学院で学び直したいと思いつつ、キャリア人生の折り返し地点をとっくに過ぎ、笑われるのではと誰にも言えず、もやもやしていた気持ちが吹っ飛んだ瞬間でした。2019年春、私の学び直しの旅が始まりました。

本学外国語教育学研究科での学びは、知識に渇望していた私にとって、至福の時間でした。英語教育の第一線で活躍されている先生方のご指導のもと、さまざまな背景を持つ院生たちと共に学ぶことは、貴重な体験でした。また、応用言語学の理論と教育現場での実践とを結ぶ議論は、研究科の大きな魅力でした。

2020年春、私は新たな大学で講師として勤務することになったのですが、コロナ禍に襲われました。突然始まったオンライン授業の運営に戸惑いながら、週10コマの授業と準備、課題チェックなどに深夜までパソコンと格闘する日々が始まりました。7月の終わり頃、およそ300名の課題を採点していた時、多くの学生が機械翻訳を使っていることに気づきました。

禁止すべきか、活用すべきか、英語指導者として考え始めました。あるクラスの対面授業で私は地域の魅力を英語で発信するプレゼンを課しました。決して英語が得意とは言えない学生たちが機械翻訳の助けを借りながら、地元の文化や歴史、特産物などについて調べ、いきいきと英語を操っていました。「機械翻訳を利用しない手はない」。私はそう確信しました。これが修士論文のテーマへとつながったのです。

機械翻訳技術の急速な進化は、英語学習に影響を与えています。学習者の習熟度、母語運用力で差がつく課題はあるものの、使い方次第で有能なツールになります。私は当初、英語を英語で教えるダイレクトメソッドを当たり前のように実践していました。ところが、後に英レディング大学院で英語教育における母語の重要性を学びました。

私はこれまで、豪州での日本語指導、英国での子供の言語サポート、日本での英語指導・通訳をしてきました。こうした言葉に関わる様々な仕事を通じて、外国語学習における母語の大切さを深く知ることができました。そして、今、機械翻訳の教育的利用という研究テーマに出会ったのです。このテーマにおいて、母語の力は重要なファクターです。私の「The Long And Winding Road」は無駄ではなかった、と思えるようになりました。

2022年春、私は大学生英語学習者による機械翻訳の使い方（方略）をテーマに、修士論文を執筆し、修士号を取得しました。そして、このテーマをより深く追究したいと、博士課程へ進学しました。すいぶん遠回りしましたが、ようやく研究者としてのスタートラインにたどり着いた気がします。学びの旅は、まだ続きます。これまで学んだことを生かし、少しでも社会に恩返しができるよう、精一杯、努力を重ねてまいります。